# 口腔外科研修医マニュアル　食前・食間・食後

投薬後に患者が指示通りに服用しないこと(服薬不履行)をノンコンプライアンス(noncompliance)、そのような患者をノンコンプライアント　(noncompliant)という。堀岡によると、ノンコンプライアンスの割合は30-60%であり、海野らによると「のみ忘れる」がその理由の半数を占めている。コンプライアンス(compliance、服薬順守)を高めるための服薬指導について考えてみたい。

## １．食事と服薬

服薬は、日常生活の周期と合わせたほうがのみ忘れが少ないので、食前、食間、食後など食事と関係させて服用を指示することが多い。一般に、**「食前」とは食事前３０分、「食間」とは食事後約２時間、「食後」とは食事後約30分をさす**。

服用回数は、１日の投与回数が少ないほうがのみ忘れが少ない。食事との関係では昼食時がもっとも忘れやすく、夕食時、就寝前がのみ忘れが少ない。

### (1)食後投与

食後投与は食物によって胃の粘膜が保護されるので、胃腸障害の予防に役立つが、薬の吸収が阻害されることもある。抗菌薬や消炎鎮痛剤は胃腸障害が強いものが多いので食後投与にすることが多い。例えば、アスピリン（商品名バファリン）の胃粘膜直接刺激作用はよく知られている。しかし、アンピシリンやマクロライドのように食後投与では吸収されにくいものがある。

食直後、食中の指示も食後とほぼ同様である。

食後投与の場合の食事の種類では、グリセオフルビンのように食物の脂肪の量によって吸収の異なることが明らかにされている薬剤もあるが、食事の種類、量などとの関係は不明な点が多い。木屋ら(1986)の報告では、日常的な食事では、その内容によって血中濃度の差はなかったということであり、現状では、歯科領域での投薬については、特に問題はないようである。

### (2)食間投与

食間投与は、一般には薬剤の吸収がよく、作用が的確に現れるという長所があるが、胃粘膜の刺激作用が強いことと、胃液によって作用が減弱する薬剤があること、および飲み忘れが多いことが短所である。

### (3)食前投与

食前投与は、食事の30分から60分前に服用するという意味であり、食間投与とほぼ同様の長所短所があるが、食間投与よりものみ忘れが少ない。

## ２．服用方法

薬は水または微温湯でのむものとされているが、「水」にも水道水、井戸水、ミネラルウォーターなどがあるし、さらに多種多様な清涼飲料水あるいはいわゆるドリンク剤が市販されている。

### (1)なぜ薬は水で服用するのか

薬剤は多量の水で服用するのが原則である。水は薬剤を溶解して吸収しやすくし、また、希釈することによって消化管への刺激を減らす働きがある。少量の水で服用するよりもコップ１杯位の量で服用したほうが血中への移行が早く、しかも高い。しかし、食後投与の場合には、空腹時投与の場合ほどに水の影響は受けないという報告もある。

水を使わないで薬物を服用すると、食道に停滞して食道潰瘍を起こすこともある。「使用上の注意」に食道潰瘍の発生についての記載がある薬剤の他にも、抗菌薬、消炎鎮痛剤では、この記載がない薬剤でも起きる可能性があるので、歯科における投薬においてはとくに注意が必要である。食道潰瘍の症状は、服用後に食道につかえたような感じがあり、やがて胸骨後部痛、嚥下時痛が認められる。食道潰瘍の発生を予防するためには、コップ１杯以上の十分な水で服用する必要がある。しかし、十分な水で服用していても発症した例がある。高齢者や口腔乾燥症患者のような唾液分泌が少ない患者、口腔腫瘍術後患者などの嚥下機能に障害がある患者では、服用時にカプセルが粘膜に貼りつかないように十分に水で濡らしてから嚥下するように指導する。また、「服用後すぐに横になって就寝しない」ようにという注意も必要である。

**食道潰瘍に関してすでに使用上の注意に記載のあるおもな薬剤**(医薬品副作用情報 No.108,1991)

| | |
|---|---|
| 抗生物質 | 塩酸ドキシサイクリン、塩酸オキシテトラサイクリン、塩酸ミノサイクリン、塩酸バカンピシリン、塩酸ピブメシリナム、クリンダマイシン |
| NSAIDs | ジクロフェナクナトリウム(商品名ボルタレンなど) |
| 不整脈治療剤 | 塩酸メキシレチン |
| カリウム製剤 | 塩化カリウム除放剤 |

**(2)お茶やコーヒーで薬を服用して良いか**

歯科領域で投与されている薬剤では影響を受けるものはほとんどない。

お茶に含まれるタンニン酸は鉄と結合して鉄の吸収を阻害するので、造血剤はお茶で服用するべきでないとされていた。しかし、最近ではこれは必ずしも禁忌ではないともいわれている。

お茶やコーヒーには、カフェインが含まれており、コーヒー、紅茶による薬剤の沈殿、結合あるいは変化、ジアゼパムなどの抗精神薬との拮抗作用、シメチジンとの併用による中枢作用の増強、循環器系薬剤の併用による作用の増強などの可能性が注目されている。

**(3)牛乳で服用してもよいか**

一般には胃腸の刺激を予防するためにタンパク質の豊富な飲み物で服用することはむしろ推奨されます。しかし、食前あるいは空腹時投与の指示がある薬剤は、吸収が妨げられることがあるので、牛乳で服用することは好ましくないと考えられます。

1998.10.12

デンタルオフィスみなと
露木 良治